

人生の全体の流れを変えるほどの強度、強さをもつ原初の瞬間というものは、ありえるものだし、おそらくあらゆる人生のなかにある。

それは一冊の本かもしれないし、ひとつの出会いかもしれないし、ひとつの事件、ひとつの不在、ひとつの遅れ、ひとつの日没、ひとつの嵐、あるいは単に、ひとつの微笑みかもしれない。

テクストのエクリチュール、物語のエクリチュール、戯曲作品のエクリチュール、あるいは小説のエクリチュールは、しばしば「礎の瞬間<sup>いしずえ</sup>」との出会いの兆しである。

あるいは、もしかすると、このように言うほうがふさわしいのかもしれない。「礎の瞬間」をみつげるために、原初の一点をみつげるために、わたしたちを真に実存の中心にたどりつかせる「存在していることの衝撃」をみつげるために、ひとは書くのだ、と！

なぜ書くのかを、ひとはわかってゐるのだろうか。

書くとは、自分自身と、そして他者と対話するための方法だ。あらゆる本は一篇の詩に似ている。「ひとは、この世に存在するものを、血潮のなかに燃え上がるものを寄せ集める。ひとはそれらから、壁紙から子どもたちの切り取る花々に似た、大輪の花束をつくる。ひとはそれをひとりの若い女に贈る」とクリスチャン・ボバンは書いてゐる。

ここに発表されるエッセーは、わたしたちの研究の成果であるだけでなく、講読や教育、そしてエクリチュールのきわめて莫大な時間のなかで経験した歩み、回り道と行き詰まり、試行錯誤と発見でもある。

書くとは、自分たちの手中におさめることになる一連の決定的な主題を繰り返し言うことではなく、ひとが知らないこと、あるいはひとがよくは知らないことを、見つけ出し、形にするために心を砕くことである。

一冊の本のエクリチュールの流れのなかで、ひとは他の人たちと、他の本と、他のアイディアとイメージに出会う。

そこにこそ、まさに対話の真の状況がある。そこでは会話の舵取りが逆になっている。すなわち、会話を運んでゆくのは、なまじわたしたちではなく、むしろ、わたしたちが運ばれてゆくのである。

そのような状況から生まれてくるものを、あらかじめ知ることができる者など、誰もいない。

それゆえ、読者が、著者その人とおなじように、道を外れていると感じる瞬間がやってくる。そしてこの道を外れることが、すでに知識によって足跡をつけられた道を外れて迷子となること、エクリチュールの経験そのものののだ。

書くこと、それはもっともラディカルな奇異なものとの出会いへと開かれることである。

それでは、書きながら、わたしは何をみつけたのだろうか。わたしは「原初の瞬間」に出会ったのだろうか。

おそらく……。

焦点となるのは、わが師との忘れがたい出会いである。彼はわたしにエクリチュールと、言葉によって隠された力を理解するための技術を教えてくれた人である。

それはリュクサンブール公園のことだった。サン・ミッシェル通り沿いにまだオートルモンディ書店があった時代のことである。哲学を学んでいたとき、授業のあいまによくそこへ行っていた。プラトン、アリストテレスの『形而上学』、レヴィナス、デリダのすべてを、それからハイデガーのほとんどすべてをそこで読破したことを覚えている。それはひとりの書き手のすべての著作を読んでいた時期で、若者に特有の熱狂だったが、その後のわたしの学問と研究に非常にためになった。

カルチエ・ラタンのノスタルジーから解き放たれることなど、けっしてないとわたしは思う。

要するに、リュクサンブルのことだった。並木道をさっそうと散歩しているのがみえた六十代の男が、わたしの隣に腰を下ろしてきたとき、わたしはメデイチの噴水のちかくのベンチに座っていた。すぐに彼にたいする好奇心が生まれた。彼の何が自分の気を引くのかわかるまでには時間がかかった。歩き方の高貴さだっただろうか？ 見られていないときにさえ感じられる、彼の眼差しの驚くほどの晴朗さ？ あるいは、彼の顔を明るく照らしていた絶えることのない好意的な微笑み？ おそらくはそのすべてが同時にあったからなのだが、彼の真の秘密は、その耳にあった。

通行人や観光客の言葉を、思いやりをもって聞き取るためにつくられた果てしない耳、自然のなかの言語と、ふつうの言葉にたいするとりわけて鋭い警戒。

彼は何も言わずに座り、礼儀正しく、手で軽くわたしに挨拶をして目を閉じた。彼はわたしのほうに顔を向けずに、このように聞いてきた。

「若い人、きみは何を読んでいるんだい？」

わたしは質問に驚かされた。質問の内容ではなく、彼がわたしに話しかけてきたという事実そのものに驚かされた。公共のベンチは図書館に似ている。ひとはなんどもなんどもおなじ人に会うことができ、それぞれはまるであたかも無人島にいるかのように振る舞う。

「わたしは『悦ばしき知』を読んでいます！」（それはわたしの「ニーチェ読破」の時期だったのである）

「哲学者なのかい？」

「哲学徒です！」

「わたしに語り聞かせてくれないかい？」と彼は優しく聞いてきた。

哲学を「語り聞かせる」ように頼まれるなんて、はじめてのことだった！

その日はじまったわたしたちの友愛は、きわめて長い年月つづいた。わたしは彼に哲学を語り聞かせたが、彼のほうがずっとよく知っていた。わたしはタルムードについて、そしてわが師たちについて話した。彼は知っていた。わたしはハシディズムを取り上げた。彼も知っていた。

彼はわたしに聴取を教えてくれた。

彼はわたしに単語の秘密を教えてくれた。彼はよくこう繰り返したものだ。「愛の物語でないならば、単語とはなんだろう？」と。

彼は母音が子音に抱く愛についての理論をしつかりもっていた。彼は言った。「文字たちは抱きあっている。抱きあつて、口づけを交わしている。口づけを交わして、そして結ばれている」と。またこうも言った。「いまをきらめかせて、夜の漆黒をこじあける夜明けの奇跡をみつけて、文字たちと恋する母音たちを踊らせるんだ。単語たちに歌を歌わせて鳥にするんだ」と。

彼は自分が詩人であることをわたしにけつして言わなかった。彼はただ、人間 (homme) でありたいと望んでいた。詩は彼が人間 (human) について考える方法の必要不可欠な一部となっていた。いとまを告げるため立ち上がるときに、「自分であるとは、自分を超えることなんだ」と繰り返すのも、彼が好んだことだった。